在京白堊會報

第3号
平成9年10月1日

啄木・賢治も"参加"して

第28回総会開かれる

去る五月十三日に、東京・原宿の東郷記念館で恒例の在京白堊会総会が盛大に開催されました。

本年は、第28回目を迎え、昭和四〇年卒の皆様に幹事の労をいただきました。当日は盛中・一高の卒業生が二五三人集まりました。

及川会長（右端）で「鏡割り」

総会は、六時に開会宣言し全員で校歌斉唱。物故者への黙禱のあと、盛岡からの来賓として、高橋忠孝盛岡一高教頭と八角正司白堊会副会長から挨拶を頂きました。続いて、在京白堊会の及川昭伍会長が会務報告のあと、事務局から前年度の活動・会計などが報告され了承されました。

啄木・賢治の詩情を披露

総会議事を終えて、舞台で力いっぱいの鏡割りと乾杯が行われて大宴会がはじまりました。当日のメーン・イベントとして、昭和四〇年卒の野口さんによる宮沢賢治の詩「チャグチャグ馬っこ」の朗読と盛岡から駆けつけた池野さんによる「初恋」「やはらかに」などの石川啄木の歌のソプラノ独唱が披露され、会場は盛岡のムードいっぱい。会場では、旧交を暖める光景があちこちみられ、2時間半の予定時間があっという間にすぎ、応援歌の放吟のあと、次年度幹事への引継式でバトンタッチをして来年の再会を誓いました。

昭和四〇年卒のみなさん、大変ご苦労様！

なつかしい友と盃を交わす

発行　在京白堊会
東京都港区虎ノ門一丁目十六番八号
飯島ビル202号
星野健秀法律事務所内
TEL03（3506）8844
FAX03（3503）7854

在京白堊会年次幹事

（追加・修正）

昭和十七年卒	小綿　恭一
昭和二八年卒	川村　伶
昭和六三年卒	菊地　拓
平成元年卒	高橋　雪文
平成四年卒	野崎　俊剛
平成五年卒	清水畑貫彦
平成六年卒	千葉英由紀
平成七年卒	日山　渉

野村胡堂の人徳

太田愛人（昭和二〇年卒）

私は一昨年から盛岡タイムスに毎週二回「野村胡堂・あらえびす抄」を連載している。九月で一六〇回になるので四百枚を越えているが、いまだに銭形平次執筆の時期に達していない。多分千枚近い原稿になるであろう。

五年前、朝日新聞岩手版に「新聞人・佐藤北江」を週一回連載したが、これは昨年まとめて恒文社から「石川啄木と朝日新聞」と題して出版した。北江は盛中第一回生として入学したが、病気のため中退している。後年、東京朝日新聞社に発足当時から加わり、名編集長とうたわれ、貧困のため窮していた啄木を入社させた人物として知られている。

北江伝を書いているうちにわかったが、啄木だけでなく野村胡堂も田子一民も新聞記者志望で北江を訪ねている。もし、明治末期、北江の下に啄木、胡堂、一民らが朝日に集まっていたら面白いことになっていたであろう。原敬はこの風潮を見て「北江にかぶれた青年たち」と書いている。それぞれが志を抱いてジャーナリストの世界に加わろうとしていたのは、薩長閥への対抗意識のためであった。

胡堂は盛中同級生の紹介で報知新聞に入るが、後年「朝日でなく報知に入ってよかった」と洩らしている。記者に対する規制がゆるく、自由に書く機会を得ることができたからである。実際、社会部長、学芸部長の肩書よりも、レコード評論家あらえびす、作家胡堂の方が多くの人々に知られ、生涯、一人三役の活動をした男として尊敬された。三六三作も「銭形平次捕物帳控」を書き続けた才能は、一朝一夕にして身についたものではない。

書斎の野村胡堂
（野村胡堂・あらえびす記念館提供）

改めて胡堂の生涯を調べてみると、今までにわからなかったことが次々に出てきて人物の奥の深さが少しずつわかってきた。盛中一年を二度くりかえし浪人二年を経て一高に入り、卒業近いのに法学部に興味を失い、授業料未納で退学と、マイナス材料が続く。逆にそれが起爆力になって未開拓の分野に進出し、弱者の側に立つ平次の心意気を貫いていく。

今日まで野村財団が奨学制度を四十年近く続けられ、多くの学者、芸術家、教師らがこの無返済奨学金の世話になっている。特に後輩の盛岡一高卒業生に受益者が多いらしい。銭形平次の投げ銭が形を変えて社会に投じられていたのだ。

この人の徳を偲ぶよすがとして紫波町に「野村胡堂・あらえびす記念館」が一昨年建てられたので是非訪問してもらいたい。

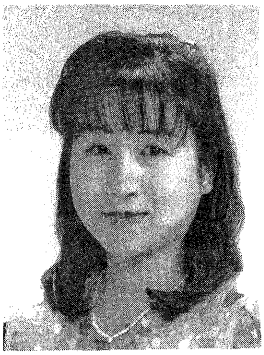
＜編集部より＞

太田愛人（あいと）さんは、現在横浜で教会の牧師さんを勤めるかたわら、執筆活動や幼児教育（かつては幼稚園長も）に携わるなど幅広く活躍されています。

とくに「辺境の食物誌」など岩手の伝統的な食生活や、「石川啄木と朝日新聞」で盛岡中学のジャーナリスト群像を紹介した著作は一読の価値があります。

また、在京白堊会の年幹事もお願いしていることも申し添えます。

がんばってます



森　知英（昭和63年卒）

森さんは、盛岡一高二年在学中に第五十五回日本音楽コンクールに入選して以来、ピアニストの道を歩んでいます。

東京芸術大学に入学後、ベートーベン国際ピアノコンクールへの第四位入賞やショパンピアノコンクールの日本代表に選ばれるなど活躍しています。

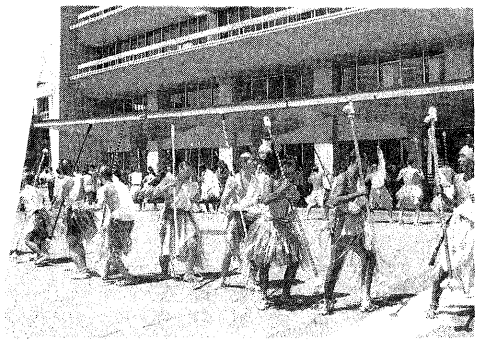
同大学院修了後、新日本フィルや東京都交響楽団との協演・リサイタルなどを行って、ソロとしての期待を集めています。私たちも世界に羽ばたく若い後輩の活躍を応援したいものです。

上田が丘に若草もえて…

盛岡一高

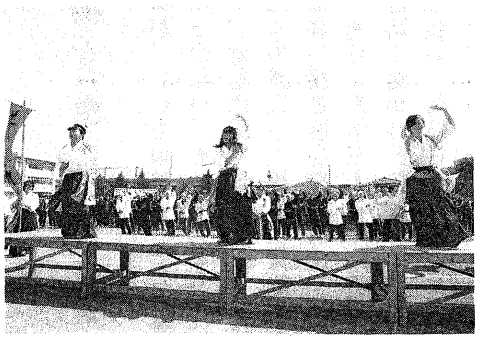
創立一一七周年運動会より

（平成九年五月十三日）

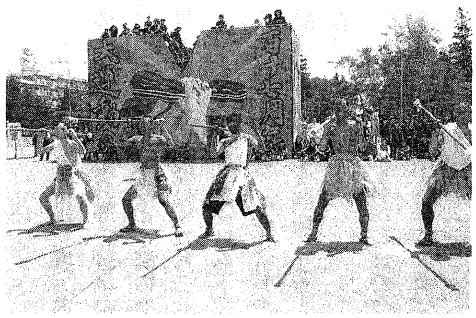


岩手県庁前で宣伝（５月12日）

「世に詠われし浩然の…」



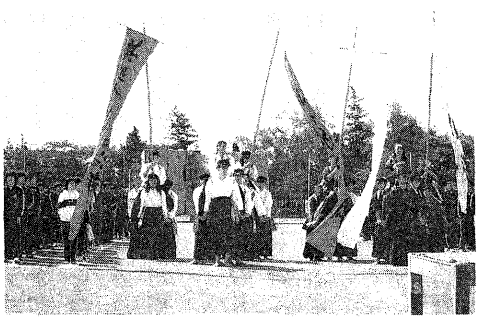
女子応援団も登場



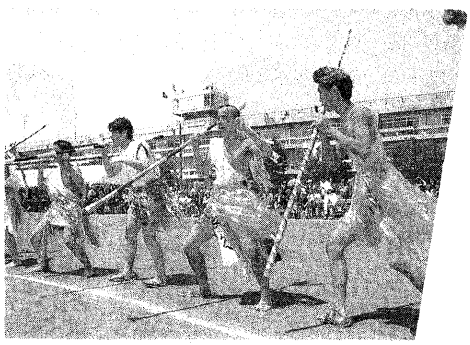
入場門前で猛者踊り（旧・土人踊り）

「ノーナマニサパヤンプリマ～」

白組大将と赤組大将の入場



ノボリを立てて騎馬戦へ



１年生は全員モヒカン刈り

故郷

加藤文也（昭和四十五年卒）

生まれ故郷の岩手を離れて生活するようになって大分たつが、私の郷里意識には格別のものがあるらしい。横浜生まれの妻は何故岩手がそんなにいいのか不思議がるが、いいものはいいとしか言いようがない。そんなこともあって、郷里に深い愛着を持ち続けた二人の詩人 ― 啄木と賢治 ― には強い親近感を持ち続けている。

先月、入学三十周年の同期会が盛岡で開かれ、久々に懐かしい友と会い、たのしい一時を過ごしてきた。多様な分野で社会の中堅になりつつあり、多くの刺激を受けることができた。郷里意識の強さは、わが友人それも特に故郷を離れた者には共通のもので、私だけが異常でないことを知り安心した。

盛岡の中学校の
露台（バルコン）の
欄干に最一度我を倚らしめ
という心境であった。

不来方城（盛岡城）の側にあった図書館に賢治の大きな写真が掲げられてあった。当時何故あんな悲しい目をしているのか不思議に思ったのを覚えている。それから生きていくことの喜びや悲しみに接する中で、あの写真の賢治の思いも少しずつわかってきたような気がする。そんな思いを持って賢治の童話を読み直してみると、それに込めた賢治の願いが痛いほど伝ってくる。

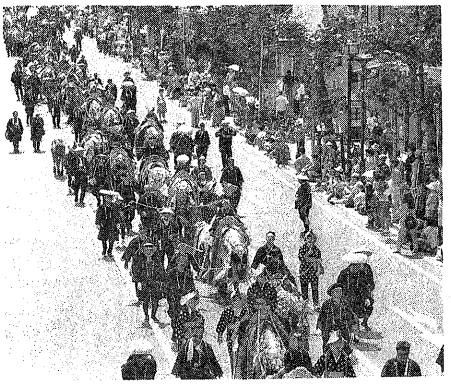
私も人の悲しみや喜びに深く共感できるよう感性を新鮮にして、新しい問題に対応できるようにしたいと思う。

盛中2年の石川啄木
（後列中央、明治32年）

盛中1年の宮沢賢治
（明治42年4月）

（写真は、「白堊校百年史」より転載しました）

盛岡ふるさと会のご案内（十月九日）



「チャグチャグ馬っこ」の大行列
（6月8日　盛岡市）

盛岡ふるさと会は、盛岡市や在京の同窓会や同郷会等の皆様の御支援により会員の親睦と市勢の発展等を目的として平成八年九月二七日に設立しましたが、本年度も下記により会員、盛岡市長や関係者多数により総会・懇親会を開催しますのでふるってご参加下さい。

なお、盛岡ふるさと会の会長は、本会の及川昭伍会長が務めています。

1　平成9年度総会・懇親会開催日時
　平成9年10月9日（木）午後6時30分から
2　会　場
　東京都新宿区西新宿2-2-1 TEL 3344-0111
　京王プラザホテル南館5階　エミネンス
　（JR新宿駅西口徒歩約6分）
3　会　費
　男性　1万円　　女性 8,000円
4　連絡先
　盛岡市東京事務所内
　TEL　3289-1521　FAX 3289-1522